







各委員の活動を終えての感想

委員名等	感想
<div data-bbox="177 286 475 555" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="209 616 406 728" data-label="Caption"> <p>つだ ゆういちろう 津田 雄一郎 座長</p> </div>	<p>忙しいながらも楽しく充実した活動であったというのが率直な感想です。仕事や年齢の違う者が集まり、一つの目標に向かって話し合いを重ねることは、新しい気づきの連続でした。同じ事柄に対しても立場や年齢の違いから見知が違い、自分は当たり前と思っていることがそうではないことも多いと改めて気付かされました。また、メンバーの中に行政職員の方がいることで、「まちづくり」という活動に対して、ヒントになる知識が得られやすい環境であったことも良かったと言えます。情報を収集するために、他市の機関に連絡を取る必要があるときもスムーズに進み、心強くありました。</p> <p>約2年間という活動期間と、様々な立場の者が集まり小矢部市に対して何か出来ないかと考えるという点に対しては、最初は戸惑いもありました。与えられた課題をこなすのではなく手探りの状態からスタートすることであり、2年間というメンバーの時間を使って研究するに足るテーマを決定することは難しいことでした。そのため、第5期がスタートしてからしばらくは、研究テーマがなかなか定まりませんでした。しかし、それも皆で話し合いを重ねるうちに自然と目標が固まりました。</p> <p>昨年、アウトレットパークの開業や北陸新幹線の開通に伴い、小矢部市の知名度は格段に上がりました。小矢部市政始まって以来の、人口の社会増が起きた事からも確実に変化が起きています。このことから、若い世代の定住に向けた研究として「おやべ暮らし」発刊の提案を行いました。</p> <p>また、そうした明るい変化と同時に、着実に進むであろう高齢化社会に向けた研究テーマとして、楽しく自発的に健康増進に取り組み健康寿命の引き上げを目的とした「健康ポイント制度」導入の提案、そして、快挙と言わなければならない全国ゆるキャラグランプリで5位入賞したメルギューくん、メルモちゃんを、勢いを途切れさせることなく更に盛り上げる「メルメルプロジェクト施策」の提案を行いました。三者三様の研究ですが、それぞれの研究を進めるうちに、改めて小矢部を知り、学ぶことが出来ました。</p> <p>まちづくり研究会第5期生としての活動を終えるにあたり活動を振り返ると、小矢部について学び小矢部をさらに好きになることができたことと、新しい仲間を得たことが個人的な成果でした。活動期間を通して小矢部のことを調べ他市と比較することで、小矢部がもっと発展してほしいと、より強く思うようになりましたし、普段、関わりを持つことのなかった委員と活動を続けることで、皆で同じ思いを共有し、同じ目標を持つ仲間となれたと感じています。小矢部の発展を目指し活動する若い仲間を持てたことで、第5期の活動が終わっても今後また、小矢部の発展に向けた別の活動で会うことが必ずあると思いますし、皆が活躍できると考えます。2年間ありがとうございました。</p>

委員名等	感想
	<p>様々な社会問題が取り沙汰されている中、小矢部市のまちづくりについて、ゼロの状態から自分たちでテーマを見つけ研究発表を行うという「まち研」の活動は、難しいと感じる部分もあり、また同時にやりがいがあるとも感じました。最終的に3つのテーマで報告することが出来てよかったと思います。</p> <p>2年間の活動の中で、市職員だけでなく、青年会議所・商工会・農協からのメンバーとも、同じまち研委員として共に活動出来たことは、今後の大きな財産になると感じています。この経験を活かして、微力ながら小矢部市のまちづくりに貢献していきたいと思います。</p>
<p>たなか ゆういち 田中 優一 副座長</p>	
	<p>約2年間の活動期間を通して、まず自分の生まれ育った町なのに小矢部市の現状や将来について考えたことがなかったなと実感しました。どうすれば小矢部市のまちづくりが発展し、住みたいと思えるのかを自分の意見だけではなく委員のみんなと話し合うことで第5期生全員の意見が反映された結果に繋がったと思います。また、異業種間の話し合いにより、それぞれの立場や環境ならではの意見やアイデアが生まれ、同世代ではなかなか自分の住むまちについて考える機会がなかったので、小矢部市について見つめなおすきっかけにもなりました。委員ではなくなりますがこれからも自分なりに小矢部市のまちづくりに少しでも貢献できるよう業務を遂行していきたいです。</p>
<p>さきもと ゆか 笹本 有香 委員</p>	
	<p>2年間の活動を通じて、様々な職種の方と本音を交わしながら、本市が少しでも活性化するように知恵を出し合った思い出は今でも心に残っています。部員一人一人、仕事や家庭環境の違い、各種団体にも顔を出したりと、なかなか活動は思い通りに進まない場面もあったかと思います。</p> <p>しかし、現在の本市の現状を見つめ直し、より良いまちになるために、まち研の存在は大切であることを改めて感じました。「個では難しいことでも、皆で束になり、協力すれば太い柱になる」の精神を心に刻み、ここで学んだことを今後の仕事や家庭で生かしていきたいです。</p>
<p>わだ まさる 和田 勝 委員</p>	
	<p>まちづくり研究委員として、活動した約2年間は長いように思えましたが、終わってみるとあっという間でした。</p> <p>最初は、テーマもなかなか決まらず手探り状態で、最後に発表できるのかと思うことが何度もありましたが、委員の皆様や事務局とも協力をして無事に発表できたことはよい経験となりました。また、先進地視察として様々な市町村を視察するなど、普段の業務ではなかなかできない経験をすることができました。</p> <p>今後は、市職員として今回の経験を生かして小矢部市のまちづくりに貢献していきたいと思います。</p>
<p>おはら あきひろ 小原 明浩 書記</p>	

委員名等	感想
 <p>もりい ちひろ 森井 千裕 委員</p>	<p>ご縁があり、まちづくり研究会第5期生として活動させて頂き、先進地視察などの貴重な経験、また有意義な時間を過ごせました。</p> <p>研修成果として報告した地域の教科書や健康ポイント制度などが、小矢部市の発展や向上に少しでも繋がれば幸いです。</p> <p>先進地視察先の方、事務局の方、また委員の皆さま、約2年間お世話になりました。どうもありがとうございました。</p>
 <p>なかがわ ちえ 中川 智絵 委員</p>	<p>小矢部についてまだまだ知らないことばかりだと実感した2年間でした。まちづくり研究会を通して、小矢部市について理解を深めることができました。</p> <p>また、市内で働く同世代の方々とまちづくりについて意見を交わすことができ、とても貴重な経験になりました。会議では、わたしには到底思いつかないような提案もあり、とても新鮮でした。</p> <p>まちづくり研究会の任期は終わりましたが、今後もよりよいまちづくりを意識して、仕事に取り組んでいきたいと思えます。</p>

先進地視察研修報告（各委員の感想）

(1)「小江戸ひこね町屋情報バンク」滋賀県彦根市

津田座長

- ・ 中心市街地の活性化策であるチャレンジショップ制度（9ページ参照）は成功すれば、市街地の活性化に直接つながり、良い取り組みである。小矢部でも近年、中心市街に若い経営者の飲食店の開業が進んでいるし、まだまだ空き店舗もあるので、成功の可能性はあると思われる。
- ・ 来年以降、小矢部市を訪れる観光客の増大が見込まれ、市街地への観光客の流入を促進する策として中心市街地の活性化は必要だろうし、訪れた観光客の受け皿となる飲食店や商店が必要でもある。
- ・ 町屋の活用については、そもそも古い町屋という特殊な魅力のある物件が残っているという前提のため、そのまま小矢部に当てはめるのは不可能。
- ・ 町屋を魅力とを感じる人たちが自発的に行っている事業であり、誰かから頼まれてやっているわけではない。会の継続には参加者の熱意が必要。商工会議所がきっかけのため、不動産、住宅設備、金融機関（信用金庫）など異業種を巻き込んだ取り組みが可能な点も継続に必要な要因である。
- ・ 自分が良いと思う物を、後世に残したい、もっと多くの人に知ってもらいたい、住んでもらいたいと思うことで成り立っている。



彦根商工会議所で説明を聞く様子

田中副座長

- ・ 彦根市における町屋情報バンクは、あくまで町屋に限定したものであった。物件としても、金額的価値はないとのことであり、江戸時代に建てられたものもザラである。したがって、小矢部市の空き家対策といった観点で見れば、そのままではあまり参考になるとは思えず、違った角度で見る必要があると感じた。
- ・ 小矢部市の空き家対策として、町屋バンクのように誰かに貸すとするならば、少なくとも物件の斡旋を行っていただく不動産業者との連携は欠かせないであろう。

小原書記

- ・商店街で空き店舗が目立ってきているため、チャレンジショップひこねという6か月の家賃補助をし、空き店舗の解消をしようという取組みもしているとのこと。
- ・今までの累計で、56件行われ現在25件は継続中とのこと。直近5年以内であれば、90%近く継続をして営業しているとのことだった。
- ・実際に、昼食の際に空き町屋を利用したごはん家を訪れたが、とても雰囲気がよく、リラックスができる空間であり、町屋に住みたいや残してほしいという気持ちがあった。
- ・彦根のこの取組みが上手くいっている要因は、商工会ということもあり異業種の方が集まっているため（不動産業者、設計業者、金融業者等）、いろいろな連携ができることが挙げられると感じた。空き町屋に限らずに、空き家対策というのはさまざまな分野の力が必要だと感じた。



活用物件「ごはん家くまぐま」にて昼食

和田委員

- ・活用される年齢層は30～40歳代が多く、彦根市民と市外からの転入と両方のケース
- ・飲食店や、住宅に成り立った数が9件ある（町屋バンクで取扱い、成約に結び付く）。
- ・対象物件は主に昭和20年以前に建築された木造物。市内にどれほど空き家があるかは把握できていないのが現状（市把握分では8,500戸ほどか）。
- ・物件によっては、担保価値が無く、改修費のローンができない問題や、莫大な修繕費を必要とする場合が多々ある。
- ・市内の学生が、卒業論文としてコンソーシアムの取組みを題材として研究している。



空き家バンク活用物件の外観

市内の学生と連携し、学生が主体となり、イベントも開催

- ・移住された方々が、今後もその地に住み続けられるように、自治会とつながりを持てる環境づくりが重要である。
- ・視察当日現在、物件が2件だけであった。今後の課題として、物件数の

確保、市民への周知徹底、一部の人間が動かしている（せざる負えないかも）ことの脱却が挙げられる。

森井委員

- ・ 町屋バンクに登録された物件は古いため、建て直した方が安い物件ばかりであるが、文化財登録されており、通常空き家と呼ばれる物件と違い付加価値がある。
- 小矢部では空き家の所有者が不明な物件も多く、文化財となりえる空き家もあまりないと思われる。彦根市を手本にした空き家バンクを運営させるのは難しいのではないか。

「空き家バンク」の実際の売買物件



～まとめ～

- ・ 彦根の中心市街地の活性化策であるチャレンジショップ制度（※1）は、小矢部市でも効果があるのではないか。
- ・ 商工会が中心となり、異業種（不動産業者、設計業者、金融業者など）を巻き込んだ「空き家バンク」の体制（※2）が、‘空き家の解消+定住’につながっている。
- ・ 小矢部市において、彦根市と同じ体制で「空き家バンク」を運営するのは難しいと思われる。

（※1）チャレンジショップひこね・・・彦根商工会議所が行う、中心市街地商店街の空き店舗の出店希望者への支援制度。出店者は、商工会による家賃助成・広報等の支援・経営指導等を受けることができる。

(※2) 空き町屋を借りたい・買いたい人への物件の紹介や説明、物件の維持管理作業などの専門的な対応は、空き家バンクを運営するコンソーシアムに所属する不動産業者が行なうなど、民間業者による営利以外の活動に支えられている。

(2) 「‘三井アウトレットパーク滋賀竜王’ と町活性化の取組み」 滋賀県竜王町

津田座長

- ・ 竜王町として、積極的にアウトレットを誘致したわけではないが、進出に当たっては用地取得の法的なサポートなどは町で行った。
- ・ アウトレット進出後も、町内への観光客の積極的な誘致はそれほど行われていない。要因としては、自治体の規模が大きいこと、竜王町自体に商業施設、観光施設が少ないこと、受け入れる施設がないので受け入れようという気運もおきなかったように見受けられること、アウトレットパークがインターチェンジの直近のため、訪れた人はアウトレットだけを目的に来て帰ってしまうことなどが考えられる。
- ・ 行政としての竜王町の考えは、アウトレットはあくまで一商業施設である、というもの。行政のまちづくりへの影響は小さく、アウトレット側の関与も限定的。
- ・ アウトレット進出のデメリットは交通渋滞、ゴミの増加、生活道路への観光客の流入などがある。開業当初に大規模な交通渋滞を引き起こしたが、現在は解消。既存の大規模製造業や、アウトレット開業後に進出してきた大型物流企業も数社あることから、他業種への渋滞の影響は小さいようだ。また、現在も大規模な企業団地の計画が進行中。
- ・ インターチェンジとアウトレットパークの距離について、竜王町役場の方からは、少し距離があることが、逆に他の施設へ導くきっかけになるかもしれないと意見をいただいた。



竜王町役場にて、政策推進課、産業振興課の担当者から説明を聞く様子

田中副座長

- ・ 竜王町におけるアウトレット開業の経緯は小矢部市と大きく異なるものの、町の規

模を鑑みるに、交通渋滞や周辺の飲食・宿泊といった点で抱える問題については、共通する部分が多くあると感じられた。

- ・ 竜王町の場合はインターを降りてすぐ目の前の立地であるが、小矢部の場合は少し距離があるので、その立地条件がアウトレット以外にも人を呼び込むきっかけとなれば、と期待する。
- ・ 周辺の（及び市街地）の飲食店については、外から来られた方には分かりやすいよう「食べ歩きマップ」のようなものを作成してはどうかと考える。おそらくではあるが、海外からの客層も見込んでいると思うので、複数言語に対応しているとなお良いであろう。

小原書記

- ・ アウトレットの進出によるメリットは、昼間流入人口の増加、雇用機会の拡大であり、デメリットは沿線国道沿いのごみの増加とのことだった。
- ・ メリットとして挙げた昼間流入人口が増加するため、短期的に効果がでるのはやはり観光とのことだった。また、アウトレットの名称に、市町村の名前が入ることはすごく大事で、全国的に名前が売れるとのことだった。
- ・ もう一つのメリットの雇用機会の拡大であるが、実際に従業員のうち竜王町に住んでいる方は、1割ほどとのことだった。
- ・ デメリットのごみ問題も、地域の清掃活動に三井側も協力するなどして、周辺住民に理解を得ているとのことだった。また、アウトレット内の店舗とも、共催イベントを実施するなど地域と良好な関係を築いているとのことだった。
- ・ 小矢部市としても、確実に増加する昼間流入人口をどう市内に波及させるのかが課題だと感じた。
- ・ 市外の従業員が多いのならば、市内に住んでもらえるような取組が必要であると感じた。
- ・ 共催イベントや清掃活動に、三井側や店舗の従業員に参加してもらうことはすごくいいことだと思った。
- ・ 竜王町としては、アウトレットに関連しての取組はしていないとのことだった。ただ、毎月第2、第4日曜日に、施設内イベントスペースを活用し、地元の新鮮野菜や果物などの対面販売（竜王まるしえ）を実施していた。
- ・ 竜王町としては、アウトレットの賑わいを町の活性化に生かしたいとは考えているが、具体的にやっていることもなく、消極的な印象をうけた。小矢部市の場合と違い、誘致して開業したわけではないため、町民の方に開業に対しての不安感もなく、町としてもこのチャンスをなんとかして生かさないといけないという強い気持ちはないので感じた（竜王町では区画整備が進んでおり、新規にいろいろ活動することが難しい点もあるのかもしれない）。

和田委員

- ・ 町内の道の駅や公園の観光客が増加した。これは、アウトレットからの距離が近いという要素もあるのではないかと。小矢部はすぐ隣が道の駅のため、増加が期待される。
- ・ 町は町、アウトレットと関連して、売り込もうとする様子はあまり無かった。実際に、商店街と取扱い品目や年齢層の違いがはっきりしているとも言われた。
- ・ 市民も求人に応募すると考えられるが、若者の洋服や宝飾品を売れる市民が実際に何人いるであろうか。合同面接や、店舗からの求人はあるが、町外が大多数を占める。(町民1割)
- ・ 集客力のある場所であるため、地元の観光PRや小・中・高校生の吹奏楽発表会など、町民が活動できる場所は必須。小矢部も、和太鼓や獅子舞、曳山、行燈など祭りが盛んな土地柄である。ここで披露することもいい地元活性化になるのではないかと。
- ・ 小矢部市の農畜産物が豊富である面を生かすために、地元生産者が販売できるような対面販売を実現したい。ただ、店舗に置くだけでなく、「これが私が作った野菜です」とお客様に説明できる場所があれば良いと考える。

森井委員

- ・ 竜王町と小矢部市のアウトレット設立の経緯が全く異なっている(竜王町は三井不動産が自発的に設立しており、誘致はおこなっていない)。
- ・ 竜王町は農地の整備事業により水田及び道路の拡幅等の整備がされたが、都市計画法により非開発地域と指定されており、開発許可が下りず自由な建設ができない。そのため、アウトレット建設後も周辺の店舗等に変化はないとのこと。

→小矢部は市内全域が都市計画区域ではあるが、用途地域の制限は厳しくなく、アウトレット周辺地に非設定の場所も多くあることから、アウトレット開業後、建設地周辺に店舗等が増えるのではないかと。

- ・ アウトレット開業により約 2,000 人の雇用が増えた(内訳: 県市外約 8割、市内約 1割)。

→竜王のアウトレットは名神高速道路 竜王 IC (約 0.5km) と近いため、県外出身者の割合が多いのではないかと。

→小矢部の場合、アウトレット建設地から高速道路である北陸自動車道 小矢部 IC



まで約9km、能越自動車道 福岡 IC まで約5km 距離がある。北陸本線は約1本／hのペースで運行。道路の4車線化は開業までに完成せず、渋滞する可能性が高く、通勤する上で、県市外から来るのは不便なことから定住人口が増えるのではないか。

～まとめ～

- ・ アウトレットの建設について、竜王町の場合は町が積極的に誘致してはならず、町としてのアウトレットへの関与も限定的な印象
- ・ アウトレットとインターチェンジの距離について、竜王が0.5km に対し小矢部は3～8km もあるが、逆にその距離こそが市内に人を呼び込むチャンスになる。

(3) 「LIFE in (若者定住促進ライフスタイル WEB SITE)」新潟県南魚沼市

津田座長

- ・ 事業を継続することで、徐々に「若者定住促進冊子 ‘LIFE in’」の閲覧者は増加している。求める結果が定住者、転入者増加という点で、一朝一夕で効果が出ることはあり得ない。ある程度の期間は、反響が薄くとも続ける必要がある。地元民が手に取る、閲覧することが第一歩で、それを飛び越して直接県外在住者にアピールするのは難しい。
- ・ WEBサイトでは想定外の閲覧者が多く出た。逆に言えば意外なところにアピールできた。紙媒体だけではこうはならない。
地域の教科書も、紙媒体とWEB媒体、両方の展開が良さそう。

田中副座長

- ・ 南魚沼市では、LIFE in (若者定住促進ライフスタイル WEB SITE) というホームページ及び冊子を利用した定住促進の取り組みについて、視察させていただいた。市役所内のアイデア会議で出された案が発端とのことであるが、実際に実物を見てみると、およそ市役所で作られたとは思えないような立派なものであり、内容についても南魚沼市の事が大変魅力的に紹介されていた。
- ・ 閲覧数について伺うと、首都圏に出て行った方々もある程度閲覧されているようで



ある。

- ・ 今後は、フェイスブックやツイッター等と連動して広がりを持たせていきたいとのことであり、どれだけいいものを作っても、見てもらえなければ意味がないという点は非常に重要であると感じた。
- ・ 市内出身の高校生に地元情報のメールマガジンを登録してもらって発信していくといったことも考えておられ、進学で市外へ出て行ってからだけではなく、市内に住んでいるうちから布石を打っておくこともまた重要であると感じた。

小原書記

- ・ しっかりと市外にでていった人を対象に、イメージ路線で冊子を作り、市内に帰って来てもらうように工夫して対策をかんがえている印象を受けた。
- ・ 市外に出ていった人だけではなく、これから出ていく可能性のある高校生たちを対象にメルマガ会員になってもらい、情報の発信をしようという取り組みを計画しているという話を聞き、いい取り組みだと感じた。
- ・ 若者世代だけではなく、国際大学等と連携し、シニア世代の定住の取り組みなどもしており、先進的なこともやっているなと感じた。
- ・ 実際に、冊子のようなものを作る際には、まじめすぎる内容だけではなく、イメージ路線での制作の必要性を感じた。定住してもらうには、いろんな層に対してそれぞれのアプローチが必要と改めて感じた。

和田委員

- ・ 人口減少に歯止めをかけ、若者の都内流出を少しでも抑えたいとの意向で、プロジェクトが取り組まれた。
- ・ 当初は、企業の求人情報や、Uターンに役立つ生活情報等を盛り込んだ情報誌の作成を予定していたとのこと。
- ・ 若者の定住促進事業として、年2回の機関紙を発行。若年層からの評判が良く、店舗に置きたいとの声が多いそう。
- ・ 実際には、この冊子を見たから移住に繋がったケースは少ないとのこと。だが、若者が商店街にお店を出店し、イベントを通じて市などとも連携するなど、少しずつ活性化に繋がっているのではないかと。
- ・ 美女旅や LIFE in のような冊子を通じて、仕事を通じて町を元気にしようとする人の紹介



は良いことだと感じた。定住に繋がったという数値に現れなくても、この町に行けばこのページの女の子に会えるかも、といった感覚で町を訪れ、飲食などを堪能してもらえば町にはお金が落ち、にぎわいにも繋がる。そんなきっかけづくりを小矢部市も考える時が来ていると感じました。

笹本委員

- ・冊子になっており手に取りやすい厚さ、目を引く表紙になっている。
- ・作成側の狙いとしてはこの冊子を読んで南魚沼市に移住してほしい、進学等で市内を離れてしまった若年層の取戻しをしたいという思いが強いように感じた。
- ・冊子を読むことで、移住だけでなく、現在住んでいる地元の人たち(特に進学を控えている高校生など)にも、自分の住んでいるところを誇りに思い地元を離れたとしてもまた戻ってこようという考えももつことができる内容だと感じた。
- ・定住人口増加の効果はすぐに出るものではないので、現状として冊子の周知の徹底が重要であると思う。イメージアップだけで終わってしまうのはもったいないので、口コミで広まりやすい Facebook を足掛りとして、冊子だけでなくインターネットを使いながら市のPRをしていけば効果的ではないかと感じた。
- ・小矢部市でも「地域の教科書」+α別冊版として、市内の飲食店や雑貨店、観光スポット等をビジュアル面重視で紹介した冊子があれば、若年層の興味を引き付けるきっかけづくりになると思う。「LIFE in」を参考に若者が関心のあるものに特化したもの(カフェ・ファッション・恋愛など)。

【ICLOVE について】

- ・国際大学、市内金融機関、商工会と南魚沼市が連携し、①中小企業の東京や海外進出や新規事業のサポート ②産学官連携による地域活性化モデルの確立 による地域振興を目指すもの。
- ・市が主体として取り組んでいるのではなく、国からの要請というウエイトが大きいように感じた。
- ・環境要因(市内に国際大学がある)が強く影響しているので、小矢部市で同じような取り組みは不可能に近そうである。
- ・市内企業の海外進出支援が目的であるが、市内の企業からすると漠然としていて、意欲をもって取り組むところは少ないのではないか。

【南魚沼市女子力観光プロモーションチームについて】

- ・女性の視点からの新しい切り口で南魚沼市の観光を考え、イベント企画や観光関連事業への提案を行うことを目的とした、年齢も職業もさまざまな一般ボランティア 10名の女性により結成されたチーム。メンバー構成は、20代~40代の主婦の他、公務員、会社員、県外から嫁いできた者など。女性の視点から南魚沼市のカフェやイベント等をブログ上で紹介する活動などを行っている。

- ・女性ならではの発想や思い付きが効果的に反映されており、自分たちの意見を意見だけで終わらず実際に形にしてくれるという市民からの支持も集めやすい取り組みであると思った。

森井委員

- ・新潟県南魚沼市は、ターゲットを若年層に絞り、U・Iターンしやすい環境づくりに力を入れていた。また、今後転出する可能性のある高校生をターゲットとし、メールマガジンの配信や facebook の開設などを予定しているとのこと。
- ・以前の商店街はシャッター街であったが、店の世代交代や、新しく出来た図書館と絡めたイベント（ワークショップ等）が増え、店の数も以前よりは増えた。
- ・今後は、事業と連動性を持たせ参加者による拡散を目指している。実効性のある定住施策とセットで進めないと、今後も効果が望めないという課題がある。
- ・「Life in」や「美女図鑑」は、店頭で販売されてもおかしくない、目を惹く、思わず手にとって見たくなるような表紙でした。「美女図鑑」については、モデル希望者が多いことから面接により選考して決めているとのこと、若年層の注目が高いといえます。注目や関心を持たれるためには「目新しさ」や「差別化」が重要であること、SNS 等による最新ツールでの情報発信を欠かさないことなど、今後のテーマへの取り組みにも参考となった。

中川委員

- ・「LIFE in」は若者をターゲットにした構成で、ターゲットを絞った背景には学生の関東圏への進学が多く、卒業後のUターンが少ないという状況があった。「LIFE in」の紙面は若者に喜ばれそうな構成となっており、写真も目をひくものばかりだった。市の人口減少の原因を明らかにし、狙いを定めた定住促進事業が効果的だと感じた。また、小矢部市も南魚沼市と同様に、市内に大学がないため、学生のUターン促進は課題だと思う。若者が住みたくなるPR方法は見習いたい。
- ・地元の女の子をモデルとして市の名産や観光地を紹介する観光パンフレット「美女旅」については、地元の高中生から応募が多数寄せられているとのことだった。地元の高中生が冊子に載っているということから、観光客だけではなく市民も冊子を手に取り、地元の魅力を再発見するきっかけにもなっているのではないかと感じた。「LIFE in」に加えて、「美女旅」もUターン促進に一役買っていると思う。

(4)「十日町ナビ（観光アプリ）・大地の芸術祭」新潟県十日町市

津田座長

- ・ナビアプリのメインの機能は予想の範囲でとくに驚くことはないが、プッシュ配信で災害情報などを送信できれば良い。現状では市のホームページの災害情報へのリ

ンクのみ。

- ・小矢部で展開するとすれば、単なるナビアプリ、情報だけでなく、クーポンなど、利用者への直接のメリットがないと使ってもらいにくいのではないかと。紙媒体のグルメマップ的な物はすでにアウトレットに置かれている。

十日町ナビ「ジャンルから探す」の使い方

1 TOPページの「ジャンルから探す」をタップします。

2 探したいカテゴリにチェックします。

3 一覧が表示されます。行きたい場所をタップします。

4 スポットの情報が表示されます。ここから電話やマップが表示されます。

スポットの紹介

棚田

イリヤ&エミリア・カバコフ
農舞台内のテラスから見ると詩と棚田の風景が融合して現れます。

photo by ANZAI

花咲ける妻有

草間彌生
巨大な花のオブジェがたくましく咲き誇る世界的アーティスト草間彌生の作品。

photo by Osamu Nakamura

「森の学校」キョロロ

手塚貴晴+手塚由比
自然科学をテーマとした教育施設です。

撮影：佐藤一善

越後妻有里山現代美術館 [キナレ]

原広司+アトリエ・ファイ
建築研究所
大地の芸術祭のメインステージとなっている現代美術館。

photo by Osamu Nakamura

最後の教室

クリスチャン・ボルタンスキー
+ジャン・カルマン
廃校となった小学校を利用した「人間の不在」を表現した美術館です。

photo by H.Kuratani

ポチョムキン

カサグランデ&リントーラ建築事務所
長年ゴミが不法投棄されていた場所が美しい公園に生まれ変わったアート作品です。

photo by ANZAI

お問合せ先 新潟県十日町市役所 観光交流課

開庁時間：平日(月曜日～金曜日)
午前8時30分～午後5時15分

〒948-0079 新潟県十日町市旭町251番地17
TEL.025-757-3100(観光企画係)
TEL.025-757-2637(芸術祭企画係)

田中副座長

- ・十日町市では、市内の施設やスポットを効率よく探すことのできるアプリケーション、十日町ナビについて話を伺った。実際に、アプリを自分の携帯にインストールして使用してみたところ非常に操作性がよく、宿泊施設やコンビニなど、目的の施設が容易に見つけることが出来た。
- ・アプリの製作は業者に委託されたとのことであるため、小矢部市でも導入するとなると費用対効果の検証が必要に思われる。しかしながら、少なくとも検証するに値すると思われるほど、魅力的なアプリだった。

小原書記

- ・導入当初は利用数が伸びるものの、経過年数に比例して利用数が減少しているという説明や、イベントの時はアプリの起動が増えるが、ない時はあまり起動されない



2015年
7月26日(日)~9月13日(日)
会場:越後妻有地域(新潟県十日町市・津南町全域)
<http://www.echigo-tsumari.jp>

【問合せ先】大地の芸術祭実行委員会事務局 TEL 025-757-2637 FAX025-757-2285 info@echigo-tsumari.jp

など、実際に運用している自治体の生の声が聞けて大変参考になった。

- ・ソフトの更新など継続的に運用する大変さも感じた。
- ・十日町市主催の大地の芸術祭だが、周辺の自治体への経済効果もあるとのことだったので、広域的に盛り上がっている印象を受けた。
- ・小矢部市でも、アウトレットを絡めた活性化に加えて、自ら企画したイベントで交流人口を増やすことや、隣の砺波市ではチューリップフェアという大きなイベントもあるので、そこに来た人に小矢部にも来てもらえるような企画があればいいのかなと感じた。

和田委員

- ・携帯による町の暮らしや旅を楽しむアプリ（3年に一度の開催である大地の芸術祭や、温泉、宿泊施設、交通情報など市民や市外から訪れる方々に情報を提供できるシステム）は、この時代に合った取組事例だと感じた。

- ・Layar 機能は、若者はダウンロードや操作等をすぐ実践できそうな印象だったが、壮年層や高齢者には難しいのではないかと感じた。個人的にも、そう言った意見を反映して作られたのが、十日町ナビではないだろうかと思う。
- ・小矢部市役所のHPにもリンクできる形で、小矢部も携帯サイトが一つあれば便利だと感じた。模倣だと言われればそれまでだが、ヒントをいただき、市として取り上げてみてほしい。
- ・クマや台風情報等テレビの字幕や新聞にしか出てこないワードを常に持っている携帯にアップすれば、いざとなった時必要で、助かることに繋がるかもしれない。

笹本委員

- ・業者にアプリ作成を委託している。見やすいアプリになっているが委託しているためコストがかかる。
- ・AR機能（拡張現実）を使用していた従前のアプリは、観光客にとって楽しいコンテンツがあったが、断続的なアクセス数は得られなかった。
- ・小矢部市でも同じようにグルメマップを作成するとしても一過性のものになってしまうのではないか。
- ・イベント時のみ有効的なアプリになってしまうのであれば、費用のかかるアプリではなく、紙のものを作成してコンビニやアウトレット等に設置するのもいいのではないかと思った。
- ・視察先の市の方も「食」が取り掛かりとしては最も重要であると言っていたので、グルメに特化したものを作成したらいいと思った。

森井委員

- ・AR機能は、アプリ導入当初は目新しく利用者も多かったが、数年経過した現在の利用者、導入当初より減少している。

中川委員

- ・十日町ナビの開発にかかった経費が膨大で驚いた。紙ベースのマップは更新のたびに印刷が必要となるが、それに比べてアプリのマップ機能は更新が簡単なのではないかと想像していた。しかし、更新ができる担当者は1人だけと聞いて、技術的にも手間がかかるという印象を受けた。誰でも随時更新できるという点では、facebook など既存の SNS を活用するのが一番容易かもしれない。
- ・イベント時に「十日町ナビ」へのアクセス数が伸びるという話を聞いて、小矢部市もグルメマップを作成するとなれば、対象とする年代や配布（配信）時期などターゲットを絞って作成するのも効果的かもしれないと思った。

(5) アオーレ長岡「市役所窓口や市民交流機能を持つ複合交流施設」新潟県長岡市

津田座長

- ・アオーレ、まちなかキャンパス共に取り組みの規模が大きく、そのまま小矢部に当てはめるのは不可能だと思った。ただし、クロスランドおやべは隣に総合保健福祉センターがあり、行政のサービス窓口が近いことから、アオーレと似た性格の施設であると感じた。
- ・行政のワンストップサービスができれば良い。小矢部は市役所と総合保健福祉センターが離れていて、子供が生まれたときなど、行ったり来たりしなくてはならず不便。

田中副座長

- ・長岡市では、市役所機能も備わった複合施設である「アオーレ長岡」と学びと交流の場としての「まちなかキャンパス長岡」を視察した。いずれも新しい建物であり、駅前という立地条件も合わさって、賑わいをみせていた。小矢部市においても駅前の整備計画が現在進行形で進んでいるため、将来このようになればという希望を抱いた。

小原書記

- ・アオーレ長岡については、市民の側に立ってしっかりと作られており、市民からの評判も良いとのことなので、庁舎を移転する際には参考にしてはどうかと感じた。
- ・市民と行政の関係が、昔から良い関係だと感じた。小矢部市でも、市民と行政の垣根を低くする必要性を感じた。

和田委員

- ・近代的で解放感のある建物で、驚きを覚えた。富山のグランドプラザほどのスペースかと想像していたが、奥行きがあり、とても広かった。体育館(アリーナ)が併設とのことで、地元のバスケットボールチームのホームグラウンドとして活用していた。
- ・各種ホールがあったり、シアターがあったりと、とにかく規模が大きかった。小矢部で言えば、クロスランド(ホール等含む)と市役所、総合体育館、文化スポーツセンターが一つになった施設。憩いと集い・出会いが一つに集結した現代的な形。無限の可能性を感じた。
- ・施設内の市役所窓口は、基本、年末年始の休暇のみで、土日も営業しているとのこ



と。「土日だから休みです」「書類の発行は出来ません」ではタイムリーな対応はできない。したがって、日本一の窓口サービスというのは、こういった姿に現れている

- ・小矢部でこの施設並みのものを建設することは、財政的には難しいように思う。だが、アウトレットという大規模な施設ができ、町は少しでも活性化しようと、ミルクケーキの販売を町の飲食店で取り組んだり、商工会等を通じてイベントを重ねるなど、取組を通じて、市に訪れる数も増えているという事実がある。

目先ですぐ結果を求める人間の本性があるのだが、数年後を見据えて、色々と取組み、街が元気になったと感ずることができると数が増えるだけでも、進展に繋がると思うので、そんなことから始めていきたいと思う。

笹本委員

- ・市民の目線に立った行政であり施設であると感じた。
- ・全体的に開放感があり、市民と行政の距離を縮めようとする思いが反映された施設
- ・土日営業しているとのことで、親子連れで窓口に来られている人も多く、子供にとって行政が身近に感じられるのは、とてもいいことだと思う。



森井委員

- ・土間をイメージした作りは、多方面から市民を呼び込むような作りとなっていた。また、議会はアオーレ長岡の1階に設けられ、ガラス張りとなっているため外から中の様子がうかがえる。アオーレ長岡で議会をするようになってから、傍聴者は最大で3倍増えただけでなく、アオーレ長岡は保育園の遠足の目的地としても利用されているとのこと。市役所の本庁機能もあり、子供から大人まで、年齢に偏りがなく利用されていた。設立当初は箱物を作って無駄だという意見もあったようだが、現在はそのような意見は全くないという。
- ・市役所窓口は土日営業しているとのことで、視察に伺った日も運営されていた。アオーレ長岡は周辺の飲食店を利用してほしいという期待から、あえて飲食機能を設けなかったとのこと。
- ・現地を見学させて頂いた際、催しが行われていたこともあり、活気があった。その隣では、行政手続きを行えたり、議会があつたりと行政が市民生活に溶け込んでいるように感じた。

中川委員

- ・「アオーレ長岡」は市役所というよりも、市民の活動の場として市民に受け入れられているという印象を受けた。「市役所は用事がないといかない。」とか「市役所はなんとなく行きにくい。」と知人に言われることがよくあるが、長岡市役所の場合は市民が気軽に立ち寄れる場所となっているように感じた。また、議場が1階にあるので、市政が身近なものになっているのかもしれない。

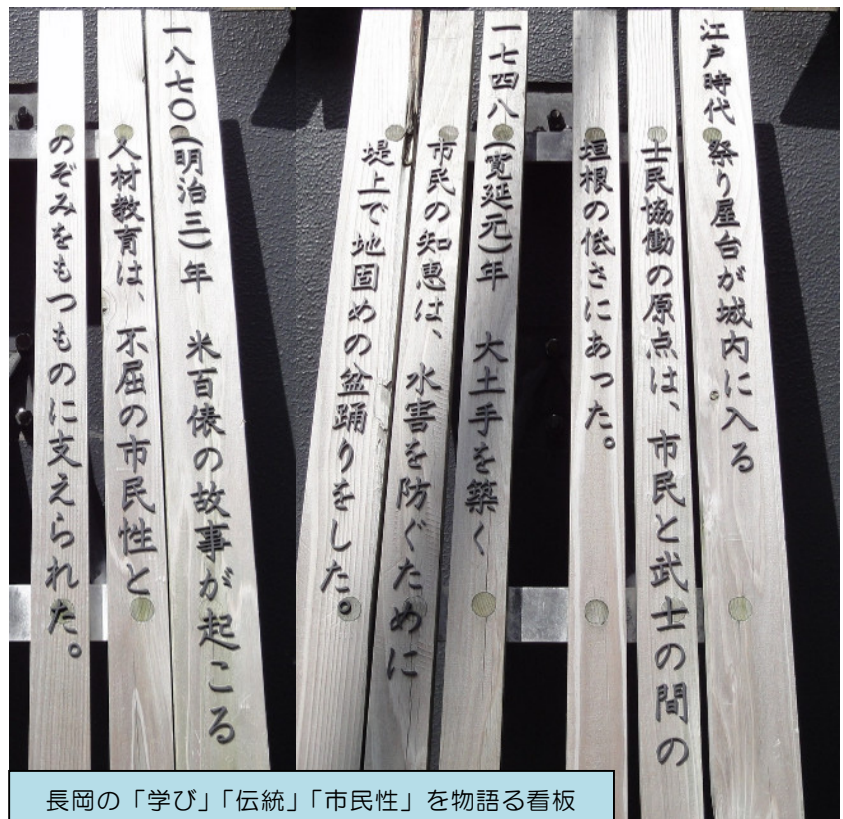
(6) まちなかキャンパス長岡「学びと交流の拠点」新潟県長岡市

津田座長

- ・まちなかキャンパスは、市内に大学を3つ抱える点、古くから歴史的な由来がある点などが作用し成功しているようだ。

田中副座長

- ・開催している各種講座について、興味深いものが多く見受けられた。一般に生涯学習講座というと年配層の参加が多いように思われるが、こちらでは40~50代の方の参加が多いという事であり、それだけ魅力的な講座が開催されているのだと思われる。



小原書記

- ・まちなかキャンパス長岡については、興味のある講座や施設が充実しており、このような施設が市内にあれば、市民の学ぶ意識の向上などさまざまな影響をあたえることができるのではと感じた。

和田委員

- ・まちなかキャンパスでは、各講座に多くの利用者がいる。‘定年を迎えた人’や‘新しく取り組みたいが一人では…’、そうした場所が無いという人達のサポートに繋がっている。
- ・中高生の勉強のスペースも見られた。家に閉じこもりがちな子供が多い時代に、外

に出て仲間と共に取り組むことは大いに良いことだと感じた。

笹本委員

- ・ 講座のテーマ選別が面白い。
- ・ 小矢部市でもこのような講座があれば行ってみたいと思う人は多そうに感じる。
- ・ 講座を開く場所に捉われず、市内のカフェや飲食店に場所を提供してもらっても面白そう。
- ・ 現時点でもこのような生涯学習の場が設けられているのかもしれないが、周知率は低いように思われる。

中川委員

- ・ 「まちなかキャンパス長岡」は、駅前からほど近いビルにあり、市民の生涯学習の場となっていた。長岡市にまつわる講座も多数開講されているようで、市民が地元の良さを発見する場にもなると思った。

まちづくり学科

開催講座の一部

長岡の昭和30年代史 【5回連続講座】



ねらい

昭和30年代は、高度成長期のなか、大きな災害があったり、市町村合併が進んだり、激動の時代だったのではないのでしょうか。体験者の話やさまざまな資料を通して、当時の市政や市民の暮らしの変化を探ります。この時代を知ることは、きっと将来のまちづくりのヒントになるでしょう。

定員

30名(先着)

受講料

5回で3,000円

会場

まちなかキャンパス長岡 3F 301会議室

申込
4/10(金)～

1

内山・上村市政の思い出

昭和30年1月の市長選挙で松田弘俊を破り、内山由蔵が第10代の長岡市長に就任しました。それから昭和37年12月の辞任までの約7年間の激動の内山市政と、その後の4年間の上村市政の出来事を、当時の関係者から話を伺いながら、ひもといていきます。

5/25(月)
19:00～20:30

前長岡市政100年のあゆみ編集委員会
副委員長 関哲生
長岡市立中央図書館
館長 金垣孝二



長岡再発見カフェ

長岡を愛するあなたに…

定員

各20名(先着)

受講料

各500円(1ドリンク付)

会場

まちなかキャンパス長岡 4F 交流広場



スパルタ式!ゆるキャラの育て方

今やどこへ行っても地域おこしや観光イベントなどのPRに登場する「ゆるキャラ」。長岡市も各地域のゆるキャラが出そろい、ここからゆるいけれど激しい生存競争(?)が始まります。これからのゆるキャラの可能性やゆるくない活用方法など、ゆるキャラの未来を占ってみましょう。

11/11(水)
19:00～20:30

申込 10/13(火)～

株式会社タカヨシ経営企画室
室長 佐々木聡



長岡の百年企業を訪ねて

新潟県には創業100年を超える「百年企業」が約1,000社あり、さらに長岡市は県内では一番多いのだとか。長岡に古くから根付く企業を紹介し、取材を通じて感じた百年企業のイメージや、印象的なエピソードをお話します。

H28.1/22(金)
19:00～20:30

申込 12/10(木)～

新潟日報長岡支社
報道部長 諏訪敬明